

児童養護施設における職員研修プログラムの作成(第2報)—心理劇導入の意義と課題

伊東正裕¹⁾、松本京介¹⁾

1) 新潟医療福祉大学 社会福祉学科

【背景・目的】児童養護施設の入所児のうち、保護者から虐待を受けたために保護された子どもが半数以上を占めている。彼らには心理療法などの専門的な支援が必要となるが、その前提として、他者との信頼関係や自己肯定感の回復のため、安心できる生活環境を保証する必要がある。そのため子どもたちと生活を共にする児童指導員・保育士など直接処遇職員(ケアワーカー)の役割は非常に重要であり、児童養護施設運営指針でも、職員の資質向上のための効果的な研修の実施が求められている。

我々はこれまで児童養護施設職員にインタビュー調査を行い、研修プログラムの開発に向けた検討を行ってきた。その結果、職員自身が自己を振り返る機会や、コミュニケーション力・セルフコントロール力を高める研修が望まれていること、そのためには単なる講義形式ではなく、心理劇やグループワーク・個別面接・事例検討などを組み合わせる必要があることが示唆された。

そこで本研究では、特に心理劇に焦点を当て、その導入の意義や課題について検討することとした。なおここで心理劇とは、治療を目的とする古典的サイコドラマではなく、対人援助者の研修に適した技法である精神分析的ロール・プレイングを指している。

【方法】児童養護施設のケアワーカーを対象に、児童の支援上の問題について心理劇を用いた事例検討を行い、職員研修に心理劇を導入する意義と課題を検討した。実施当日の参加者は計12名で、職種は、保育士6名・社会福祉士4名・臨床心理士2名であった。ディレクターは伊東が担当した。

【結果】<ウオーミング・アップ>ある参加者から、自分が勤める施設にはテレビ視聴に関して細かいルールが多く、子どもの関心が他の子のルール違反のチェックに集中しているという現状が話された。その子どもの心理はどのようなものか、職員はどのように対応することが適切なのか、ロール・プレイングを行って検討することとした。

<場面1>子1:小6の女子、子2:小1の男子

子1は、子2がテレビを見てはいけない時間に少しでも見ていると、「テレビ見た」「見ないでよ」とチェックする。子2は、「見ていない」と言い張る。この場面は、参加者の情報共有のために、話題提供者が子1を演じ、実際の状況を再現した。以下の場面では、子1・2を場面1と同じ演者が演じ、若手の参加者が順に職員を演じた。

<場面2>子1が子2のテレビ視聴をとがめて職員Aを呼びに来るところから始めた。職員Aはまず子2をなだ

めて事態を收拾しようとしたが、子1は納得しなかった。職員Aはどちらを先に叱るかという技術的な問題にとらわれ、共にテレビにこだわる子どもたちの心理を考えるゆとりはないようであった。

<場面3>職員Bが、テレビを見ていた子2を居室に連れ戻すことにして、一応はその場が収まったように見えた。しかし他児のチェックに走る子1の気持ちをどう考えたらよいのかという問題は残されたままであった。

<場面4>職員Cが、突然テレビを消して子どもたちを落ち着かせようとした。その一方的な態度に、子どもたちは強く反発した。単に事態を収めるための対応では、子どもの欲求を抑圧してルールに従わせているだけであり、適切な対応とは言えないことが明らかになった。

<場面5>職員Dは、子1の隣に座り、「話を聞かせて」と語りかけた。初めて穏やかな空気が流れ、子1は、職員と話す時間がとれればよいと思ったという。職員の役割の変化に応じて職員と子どもの関係が変わり、話し合いによって子どもを理解する前提ができたようであった。

【考察】1. 心理劇導入の意義。入所児にとってテレビは様々な欲求の代償であり、代理満足を得られる最大の楽しみとさえ言える。今回の心理劇では、ルール違反を抑え込んで表面的に秩序を保とうとすると、子どもとの関係が阻害されることが明らかになった。職員Dは、子どもを力で抑え込もうとはせず、まず子どもの話を聞こうとする役割を演じた。この態度はそれまでの職員とは対照的であり、子どもとの関係が大きく改善した。子どもの心理を理解し、安心できる生活環境を保証するために職員はどのような役割を演ずることが必要なのか。このような点を体験的に理解できることに、心理劇導入の意義があると考えられる。

2. 心理劇導入上の課題。仮に適切な係わり方を知っても、不適切な係わりをする自身の心理を職員が深く自覚しない限り、再び同様の係わりをしてしまう恐れがある。しかし単発的な研修で参加者の深層心理に触れることには、慎重な配慮が必要である。また今回は話し合いの前提となる関係ができたところで終了となったが、本来は他児のルール違反のチェックに追われている子どもの心理はどのようなものかという問いへの分析が必要である。参加者への配慮や時間的な制約など現実的な条件を意識しながら、心理劇によって十分な分析を行うには、力量あるディレクターの養成が喫緊の課題である。

【結論】職員研修に心理劇を導入することによって、子どもの心理や職員の適切な係わり方を体験的に理解できる点に意義がある。現実的な条件のもとで効果を上げることができる、力量あるディレクターの養成が課題である。

【謝辞】本研究の一部は、2015年度新潟医療福祉大学研究奨励金(人文社会系)の助成を受けて実施した。ここに感謝の意を表します。